

「狸と同棲する人妻」

「狸と俳人」



田中貢太郎

朗読

栗田ばね

# 狸と同棲する人妻

田中貢太郎



## 狸と同棲する人妻

◆昭和七年、豊田村。直と仁蔵という夫婦がいる。  
◆ナレーター、直

山形県最上郡豊田村に 沓澤仁蔵と云う 行商人があった。  
仁蔵は 壮いに似あわず、家業に熱心で、毎日のように 村から村へと 行商に出かけて往った。其の仁蔵には 直と云う 近隣で 評番の美しい女房があった。

それは 昭和七年の二月のことであった。仁蔵は 平生のように 家を出て往ったが、どうしたものか其の日も其の翌日も、 また其の翌日も帰って来もしなければ、手紙も送って来なかった。 女房の直は 心配して心あたりを探して歩いたが、何処へ往ったのか 判らなかつた。

其のうちに四月になって、山々の雪が解けかけたところで、 仁蔵が ひよっこりと帰って来た。直は 仁蔵の顔を見るなり、

直 「まあ、おまえさん」

と云って、仁蔵に取りすがって泣いた。仁蔵は良い商売があったから、さきからさきへ往っていたと云って、もうけたと云う金を 出してみせた。直は それで安心した。仁蔵は それからまた 行商に往ったが夕方には きっと帰った。

其の日も平生のように帰って来たので、すぐ夕飯にして二人で 楽しそうに 食事をしていたところで、ふいに 表の障子を 蹴やぶるようにして飛びこんで来た者があった。それは 一方の手に 棍棒を持っていたが、飛びこんで来るやいなや 仁蔵を撲りつけた。

直 「な、なにをする」

直は驚いて無法漢に立ち向った。其の無法漢は仁蔵に生写の男であった。

直 「あ」

直は眼を睜った。直は倒れている所夫の仁蔵を見た。其処には所夫のかわりに一匹の大きな狸が血まみれになって倒れていた。

直が四月以来同棲していたのは狸であった。

一方行商に出ていた仁蔵は、夢遊病者のようになって彼方此方歩いていて、やっと気が注いで帰って来たところで、女房の直が大きな古狸と睦まじそうに飯を食っているので、棍棒を執って飛びこむなり狸を撲り殺した。

直は其の夜から病気になるって寝ていたが、間もなく死んでしまった。

〈完〉

# 狸と俳人

田中貢太郎

登場人物

庄造

村人たち

## 狸と俳人

◆安永年間、蓮台寺村。庄造のもとを狸が訪れるようになる。  
◆ナレーター

安永年間のことであった。伊勢大廟の内宮領から外宮領に至る裏道に、柿で名のある蓮台寺と云う村があるが、其の村に澤田庄造という人が住んでいた。

庄造は又の名を永世と云い、号を鹿鳴と云って和歌をよくし俳句をよくした。殊に俳句の方では其の比なかなか有名で、其の道の人びとの間では、一風変わったところのある俳人として知られていた。

庄造は煩雑なことが嫌いなので、妻も嫁らず時どき訪れて来る俳友の他には、これと云って親しく交わる人もなく、一人一室に籠居して句作をするのを何よりの楽しみにしていた。

某年の晩秋の夕のことであった。いつものように渋茶を啜りながら句作に耽っていた庄造が、ふと見ると窓の障子へ怪しい物の影が映っていた。庄造は不審に思って衝と窓の障子に手をかけたが、何人か人だったら気はずかしい思いをするだろうと思つたので、其のまま庭前へ廻つて窓の外を見た。窓の外には一疋の古狸が蹲まっていたが、狸は庄造の姿を見ても別に逃げようともしないのみか、劫つてうれしそうに尻尾を掉るのであった。庄造は興あることに思つて、家の中から食物を持って来て投げてやった。と、狸は旨そうにそれを食ってから往ってしまった。

其の翌日の夕方にも庄造が書見をしていると、又窓の外へ狸が来て



蹲うすくまった。庄造しょうぞうは又食物またくいものを持って出て、狸たぬきの頭あたまを撫なでたりしたが、狸たぬきはちつとも恐おそれる風ふうがなかった。

其そのの狸たぬきは其そのの翌よくぼん晩ばんもやって来たき。庄造しょうぞうは待まちかねていて座敷ざしきへ呼よび入れた。狸たぬきは初はじめの間あいだは躊躇ちゅうちよしている様子ようすであったが、やがて尻尾しっぽを掉ふりながらあがって来たき。そして、庄造しょうぞうが書見しょけんをしている傍そばに坐すわって一人ひとりで遊あそんでいたが、暫しばらくすると淋さびしそうに帰かえって往いった。

それから狸たぬきは毎まい晩ばんのようにやって来たき。庄造しょうぞうは淋さびしい一人生活ひとりぐらしの自分じぶんに良い友達ともだちが出来できたような気がしてうれしかった。狸たぬきは庄造しょうぞうに馴なれて庄造しょうぞうが帰かえれというまで何時いつまででも遊あそんで往いくようになった。

某夜あるよ 狸たぬきがいつものように庄造しょうぞうの傍そばで遊あそんでいるうちに戸外こがは大雪おおゆきになった。庄造しょうぞうは積つもった雪ゆきを見て狸たぬきを帰かえすのが可哀かわいそうになった。で、狸たぬきの頭あたまを撫なでながら、

庄造 「おい、たぬ公こう、今夜こんやは雪ゆきだから泊とまって往いけ」

と云いうと狸たぬきは尻尾しっぽを掉ふって喜よろこんだ。其そのの夜よ 狸たぬきは庄造しょうぞうの床とこの中なかへ入はいって寝ねたが、それから狸たぬきは庄造しょうぞうの許もとで泊とまって往いくようになった。

庄造しょうぞうが狸たぬきを可愛かわいがっていることは、やがて村中むらじゅうの評判ひょうばんになった。村人むらびとは時ときどき夜よの明あけ方がたなどに、庄造しょうぞうの家いえから出でて往いく狸たぬきの姿すがたを見みることがあったが、互たがいにいましめあって危き害がいを加くわえなかった。

そして、村むらの子供達こどもたちにも、

村人達 「先生様せんせいさまの狸たぬきに悪戯いたずらしちゃいかんぞ」

と云いい云いいした。ところで、其そのの庄造しょうぞうが病氣びようきになった。

初めはちよつとした風邪であったが、それがこうじて重態に陥った。村人達はかわりがわり庄造の病氣を見舞ったが、其の都度庄造の枕許に坐っている狸の殊勝な姿を見た。庄造は自分の病氣が重つて永くないことを悟ったので、某日其の狸に云った。

庄造 「お前とも永らくの間、仲よくして来たが、いよいよ別れなくてはならぬ日が来た。私がいなくなったら、もうあまり人に姿を見せてはならんぞ。それにどんなことがあつても、田畑などは荒さぬようにしろよ。さあ、もういいから帰れ」

庄造の言葉が終ると狸は悄然として出て往った。其の夜、庄造は親切な村人達に看とられて息を引きとった。それは安永七年六月二十五日のことであつた。

それから数日の後のことであつた。一日の仕事を終った村人の一人が家路に急ぎながら、庄造の墓の傍近くに來かかった時、其の墓の前に、蹲っている女の姿が眼に注いた。其の女は美しい衣服を着て、手に一束の草花を持っていた。そして、よく見ると女は泣いているらしく、肩のあたりが微に震えていた。それは此の附近ではついぞ見かけたことのない女であつた。村人は何人だろうと思つて不審しながら其の傍へ往つた。

村人 「もし」

村人がこう云つて声をかけた途端、其の女の姿は忽然と消えてしまった。そして、其の傍には女が手にしていた草花が落ちていた。村人達はそれを聞いて、それはきつと例の狸

だっ たらうと云って、其の行為を殊勝がったが、其の心が  
村人達をして狸には決して危害を加えまいという不文律を  
こしらえさせた。爾来其の村では今に至るまで狸は獲らないことにな  
っている。

〈完〉



視聴・購読はこちらから  
<https://gekidannono.com>

ご意見・ご感想はこちらへ  
[radio@gekidannono.com](mailto:radio@gekidannono.com)

## Podcast のラジオ 好評配信中！

劇団ののでは、名作文学を声に出して演技し、収録した音声を Web 上で配信しています。複数名で読むラジオドラマタイプ、単独で読む朗読タイプなど、様々な形で朗読をしています。

みなさんも一緒に朗読を体験して楽しんでいただけるよう、本文に出てくる言葉や物語の解説も、公式サイト上で公開しています。

いつか国語の教科書で読んだ気がする、芥川龍之介・宮沢賢治・夢野久作などのあの作品やこの作品、ぜひ、役者の声でお楽しみください

## 劇団ののと読む名作文学 田中貢太郎 『狸と同棲する人妻』『狸と俳人』 Podcast 版

発行日 令和 3 年 7 月 25 日

著 者 田中幸太郎

編 集 劇団のの

発 行 劇団のの

[https://gekidannono.com/  
radio@gekidannono.com](https://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。

ゴシック体のルビは、原文に振られていたものです。

底 本 「怪奇・伝奇時代小説選集 3 新怪談集」春陽堂書店

初 出 1938 (昭和 13) 年

図書カード URL

『狸と同棲する人妻』

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000154/card42275.html>

『狸と俳人』

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000154/card42276.html>

